静　岡　新　聞　（１月４日付　静岡新聞紙面）

土屋が先制、藤浦ハットトリック

藤枝東、前半で決める

5－1 国学院栃木を圧倒

全国高校サッカー
第３日

サッカーの第七十六回全国高校選手権第三日は三日、大宮公園サッカー場など四会場で3回戦8試合を行い、本県代表の藤枝東、東福岡（福岡）帝京（東京A）など強豪が勝ち上がり、準々決勝に進んだ。藤枝東は前半9分の土屋の先制ゴールを皮切りに前半だけで4点を奪い国学院栃木（栃木）を5－1で下した。高校総体、全日本ユース選手権と合わせ三冠を目指す東福岡は、2－0で過去三度優勝の国見（長崎）に快勝。帝京は奈良育英（奈良）に先制される苦しい展開だったが、1－1からのPK戦を6－5で制した。初出場校で唯一、勝ち残っている逗葉（神奈川）は、2－1で秋田商（秋田）を破った。丸岡（福井）大津（熊本）も初の8強入り。一日置いて第四日は五日、準々決勝4試合を行う。藤枝東は大宮公園サッカー場で岐阜工（岐阜）と12時10分から対戦する。

↑藤枝東－国学院栃木　前半39分、藤枝東の河村優（右）は右からドリブルで持ち込みシュート、4点目を挙げる＝大宮公園サッカー場

▽3回戦

藤枝東（静岡）5（4－0　1－1）1 国学院栃木（栃木）

▽得点者【藤】土屋（補＝石川）藤浦3（河村優）（なし）（河村優、太田）河村優（なし）【国】毛利（PK）

【評】藤枝東は前半で勝負を決めた。

開始直後、サイドを破られたが、国学院栃木のシュートミスに救われた藤枝東は前半9分、石川の左からの折り返しを受けた土屋が決めて先制した。本来のリズミカルなプレーは少なかったものの、左の石川、右の鷲巣の両サイドバックを起点にチャンスをつくり、分厚い攻めを繰り広げた。21分、佐賀－河村優と素早くつなぎ、藤浦が仕上げて2点目を奪うと、藤枝東は完全に主導権を握った。細かいパスにドリブル突破を交えて圧倒。37分に河村優のシュートのこぼれを、藤浦がフォローしてゲット。さらに39分、河村優のドリブルシュートで4点目をもぎ取った。

後半7分、PKで1点を献上した。だが、流れは変わらず、11分、河村優がドリブルで切れ込み、太田のゴール前へのパスを藤浦が押し込んでハットトリックを達成して、再びリードを広げた。

守りはセンターバックの小沢が前日の高知（高知）戦で足を負傷し、代わって松浦が出場した。時折、カウンターで裏を取られる場面はあったが、連係が崩れることもなく、無難に国学院栃木の反撃を封じた。

「どこからでも点は取れる」

対岐阜工戦　（静岡新聞より抜粋）

対帝京戦　前半５分（国立競技場）

対帝京戦　前半９分（国立競技場）

忍耐・挑戦・勝負・そして前進

サッカー部監督

服部康雄

第七十六回全国高校サッカー選手権出場に際し、本当に多くの同窓生の方々より心暖まるご支援、ご援助をいただき誠にありがとうございました。国立で二回校歌を歌うことを目標に掲げ臨んだ大会でしたが、第三位という不本意な結果で皆様方にご報告しなければならないことが残念でなりません。

さて三年前の入学式、現三年生と共に新任教諭として出席した私は、約二十年振りに聞く校歌に熱い感動を覚えました。と同時に伝統ある藤枝東サッカー部の監督としての重責を感じ、何としてでもこの校歌を体育館の中ではなく大きな器のサッカー場で声高らかに、現役、OBが一体となり歌うことの出来る場を作り上げることが私の使命であると痛感いたしました。

一年目のサッカー部キーワードは『忍耐』、すべてにおいてガマンの年でありました。二年目は『挑戦』。覇気ある三年生を中心に決して上手ではないが、何事にもひたむきに一生懸命戦っていく集団でありました。選手権県決勝、対静学戦4対3で敗れはしましたが、後につながる大きなキッカケを作ってくれた年でした。そして今年度は『勝負』の年。ボールを大事にした、やって楽しく、見て楽しく且つ勝つサッカーを実践していこうと初蹴りの際、生徒と誓い合いました。昨年度と同一カードとなった県選手権決勝では、3対2で静学を退け十三年振りの全国出場を勝ち取ることが出来ました。表彰式後メインスタンドを中心に何回も沸き起こる「バンザイ」の大合唱。これだけ我々の優勝を待ち望んでいてくれたのかと、何とも言えぬ感激で一杯でした。これもひとえに我がサッカー部を終始暖かい目で応援してくださった皆様方のお力添えのお陰と感謝しております。一昨年のドイツ・オランダ遠征、昨年のフランス遠征など皆様方のお力がなければ決して成し得ることが出来ませんでした。あの遠征で経験出来たさまざまな事が、土台となり今回の全国出場に結びついたと確信しております。選手達もサッカー部を支えていただけるさまざまな好環境を本当に感謝しております。

これだけのバックアップ体制がありながら成し遂げられなかった全国制覇。来年度こそ国立に大きな忘れ物を取りに行く覚悟でございます。本年のサッカー部キーワードは『前進』。過去を振り返ることなく常に前向きに上を目指し精進していく覚悟です。まだまだ未熟な監督、選手達ではありますが、今後共よろしくご指導・ご鞭撻の程お願い申し上げます。

十三年ぶりの全国

サッカー部主将

青嶋　晶

『十三年ぶり十九回目の出場！』

この一文を見て誰もが古豪という言葉を想像するでしょう。しかし、選手一人一人の心の中には、そのような言葉はありませんでした。

常に全国で優勝する事だけを考えながら日々の練習に努力してきました。県大会では、なかなか自分達のサッカーが出来ずに苦労しました。しかし、内容が悪くても結果を残せるということは、成長した証であるという言葉を服部先生から聞いて選手は救われた気持でした。勝ち進んでいくうちに、選手一人一人、とくに三年生は「もっと藤枝東の仲間で試合がしたい。もっと長く一緒にサッカーをやりたい。でも、もし負けたら…。」という不安と戦わなければなりませんでした。勝ち進み、まわりの期待が高まるとその不安はなおさら強まっていきました。その度に、選手達は、全国で優勝した瞬間を頭の中でイメージし続けました。

『県大会で優勝し、全国で優勝すれば、みんなとたくさん試合が出来る』これが考えた末にたどりついた答でした。県大会の決勝が終った時も、決して満足する事がなかったのも、全国制覇を目標にしていたからだと思います。

全国大会が始まり、まわりから初戦が大事であるという言葉を聞きました。静岡県代表であるだけで強いと勘違いして、油断するのを心配しての言葉だったと思いますが、自分達は油断など全くしていませんでしたし、また緊張もしていませんでした。それは、選手一人一人が挑戦者であるということをしっかり自覚していたからだと思います。勝ち進んでいくうちに、学年に関係なく一つの仲間になっていくのがわかりました。後輩が先輩の気持ちを考え、先輩もまた後輩の事を考えてあげられる。サッカーに学年など関係ないという服部先生の口癖の本当の意味が分かった気がして素直にうれしかったです。

準決勝の試合終了のホイッスルが鳴った時、僕は、悔し泣きするより、選手、いや仲間に素直に「ありがとう」と言ってやりたかった。そして今まで応援してくれた人達に「ありがとう」と言いたかった。

結果は時間がたてば素直に受け入れる事が出来ると思う。それよりも、苦しい時、辛い時を一緒に乗り越えてきた仲間を大事にしたいと思う！

最後に、いろいろな面で援助してくださった後援会の方々、父母会の方々、試合終了のホイッスルが鳴るまで応援して下さった先輩の方々、生徒のみなさん、本当にありがとうございました。

三井ホーム
メルティーキッス
JUST DO IT.

戦い終って（国立競技場：青島スタジオ提供）

編集後記

十三年ぶりの《国立》、そして全国三位というサッカー部の快挙、この大きな話題ができて急拠、五年ぶりの『同窓会報』発行となりました。その決定から半月という時間不足と財政難（郵送代のみで百余万円）から、モノクロで一枚の比較的こじんまりとしたもの、それも「サッカー部特集」のみとなりましたこと、事情御賢察下さい。

なお、掲載した新聞記事・写真は、静岡新聞社編集局長原田誠治氏、同編集局情報調査部長安田義朗氏の快諾・提供をいただいたもの、その他の写真は、青島スタジオさんや保護者の方々、本校職員からお借りしたものです。この場を借りて御礼申し上げます。

服部監督が記しているとおり『前進』して、来年は豪華な、盛り沢山な内容の『千南原』が作られることを期待しております。

'98・2・4　文責　片山廣吉